

大阪狭山市文化財報告書23

平成13年度狭山藩陣屋跡 発掘調査報告書

平成14年(2002年)3月31日
大阪狭山市教育委員会

1・調査にいたる経過

ここに報告するのは大阪狭山市教育委員会生涯学習推進課が発掘調査を実施した狭山藩陣屋跡01-2区の成果である。01-2区は大阪狭山市四丁目狭山に所在し、この場所で行われる住宅建設工事に先だって発掘調査を実施したものである。開発者の柏村康輔氏には調査にあたってさまざまご配慮をいただいた。謝意を表したい。

発掘調査は2001年5月28日から6月10日まで生涯学習推進課の市川秀之を調査担当者として実施した。遺物実測、トレースなどの作業は、若宮美佐、橋本和美、笹岡裕里子が行い、報告書の執筆は市川が担当した。

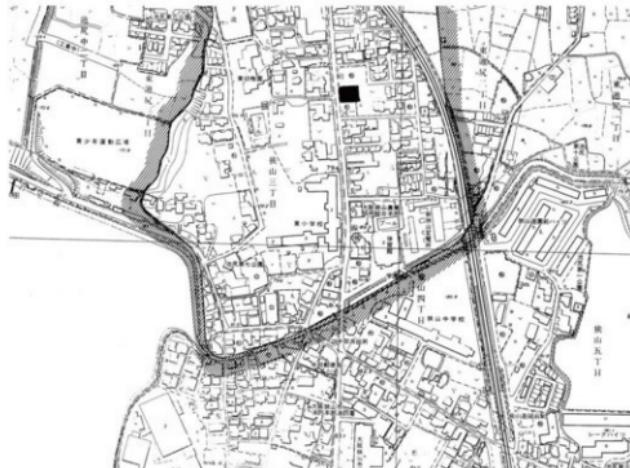


図1 狹山藩陣屋跡01-2区 位置図 (S=1/5000)

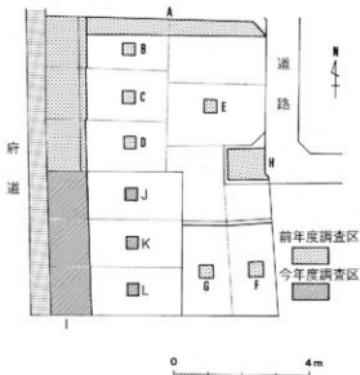


図2 調査区の名称

予定される建築は現状地盤の上にさらに盛土を施す設計であったため、これまでの周辺地域での調査成果から考えて、住宅基礎の遺構面に対する直接的な影響は少ないものと思われた。そこで全面的な掘削が行われる駐車場部分（5m×20m）について調査を実施するほか、遺構の全体的な状況を把握するため各敷地区画ごとに2m四方の調査区を計3箇所設けて発掘調査を実施することとした。調査区の位置関係、名称は図2の通りである。なお本調査区の北側および東側については昨年度に本市教育委員会が同様の調査を実施し、すでに報告書を刊行しているので、図2にはその調査地の箇所も掲載している（「大阪狭山市文化財報告書21 平成12年度狭山藩陣屋跡発掘調査報告書」 2001年）。また今年度調査を実施した各調査区は前年度の調査区（A～H区）との連続性を重視し、I～L区と呼称することとした。

2・遺構

狭山藩陣屋は近世初期に北条氏によって設けられた近世城館であり、明治維新まで継続した。陣屋は上屋敷と下屋敷にわかれ、今回の調査区は上屋敷に含まれている。上屋敷内は中央を南北に大手筋（現在の府道河内長野美原線）が走り、もっとも北側に藩主の居宅（御殿）が存在した。01-2区はこの大手筋に東接し、御殿にも程近い立地である。

今回の調査区の周辺においては、すでに数次の発掘調査が実施され、その結果上下2面の遺構面が存在することが明らかになっている。上層の遺構面は現在の地盤面よりも20cmから30cm程度下方に所在するものと思われるが、今回の調査区においてはこの面を検出することができなかった。おそらくは過去の造成によって上の遺構面はすでに掘削されたものと思われる。本調査区では結局1面のみの調査を実施しているが、この面は周辺の調査区でいうところの第2遺構面に対応することになるだろう。

（L区）

調査区全体のうち東端の南北20m、東西5mについては駐車場などの設置が予定され、面的な掘

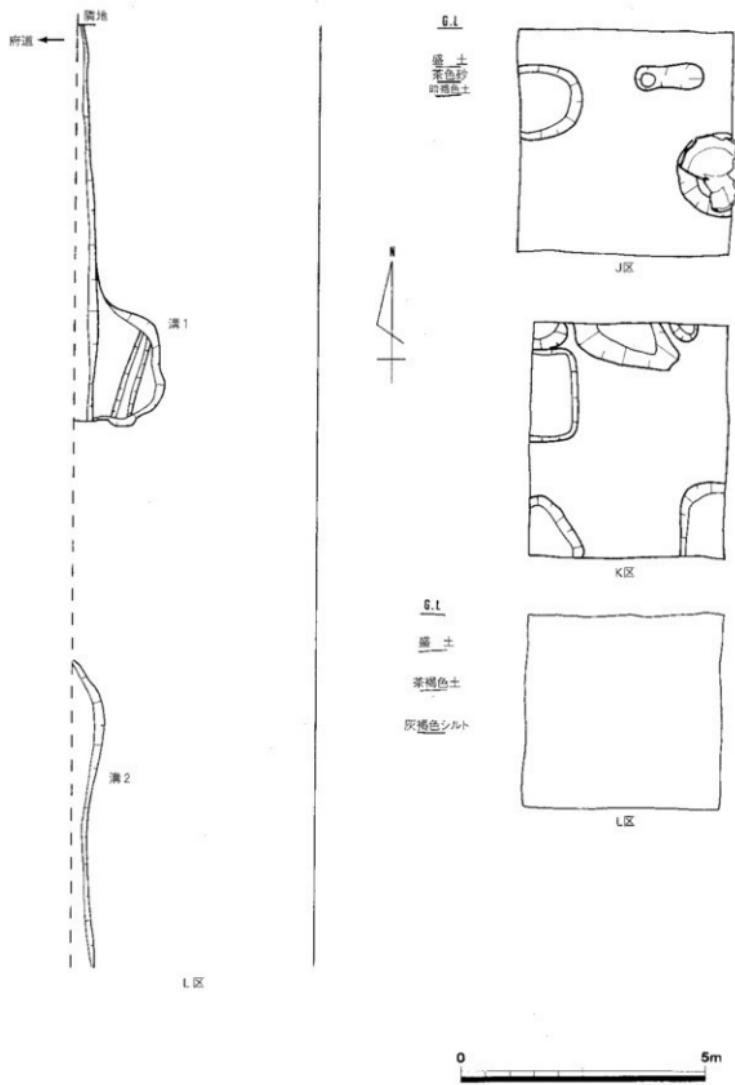


図3 狹山藩陣屋跡01-2区 遺構平面図

削が計画されていたため、全面的な発掘を実施した。現状の地盤より60 cm下がった場所（TP 78.1m）で黄褐色シルトを主体とする締まった面が存在するが、この面が周辺地域における発掘の成果から遺構面であると判断された。この面において人力で精査をおこなったところ、遺構は非常に少なく東端において南北方向の溝2条を検出したのみであった。北側の溝1は調査区内で長さ810 cm、西側の肩が検出されていないので幅は不明であるが、調査区内での平均的な幅は40 cm、南端において円形に広がりをもち東西180 cmとなっている。また深さは最大で15 cmで、底部は南から北に傾斜する。南側の溝2は調査区内での長さ650 cm、幅75 cm、深さ12 cmでやはり底部は南から北へ傾斜する。

(J区)

調査区の東側には3軒の住宅の建築が予定されていたが、現状地盤の上に盛土を施し、また建物基礎も浅いために、住宅建築によって遺構が破損する可能性は少ない。したがってこの部分については3軒の敷地のそれぞれ中央部分において2 m四方の小さな調査区を設定し、遺構の深さや性格を観察することとした。

一番北側のJ区においては、現状地盤から40 cmの深さまで最近のものと思われる盛土があり、そこからさらに30 cm掘削したところで遺構面に到達した。この面では3箇所の土壙を検出した。もっとも東側の土壙は埋壺遺構で、埠産の土師質の壺が埋められており、それ以外に土師質壺、土師皿、土人形、瓦などが出土している。

(K区)

この調査区においても、現状地盤の下に40 cmの盛土があり、その下の暗褐色土（厚さ20 cm）を除去したところ遺構面を検出した。そこでは6箇所の土壙を検出している。それらの配置には特に規則性は認めがない。またこれらの土坑内部からの遺物の検出はなかった。

(L区)

この調査区においては深さ150 cmまで掘削を行ったが、全く遺構面らしき地面を検出するに至らず、また周辺からの湧水が激しく調査の続行が困難となったため、遺構面の検出は断念した。地表近くに40 cmほどの盛土が施してあったのは他と変わることがないが、その下の土は灰褐色シルトであり、溜池などに堆積した土を思わせる。遺構面の深さや湧水の激しさを考え合わせると、この調査区全体がため池の内部に含まれている可能性が高いだろう。

3・遺物

本調査区において出土した遺物のうち実測が可能であったものは、図4に掲載した7点であった。いずれもJ調査区の埋壺遺構内から出土している。1は土人形で犬である。完形。高さ5.8 cm、最大幅2.7 cm。色調は明灰茶色。底部は平たく像は直立するように作られている。2も土人形で上下を着した正装の少年である。頭髪はないので茶坊主かもしれない。高さ5.0 cm、最大幅2.3 cm。色調は明茶色であるが、ところどころに朱色の顔料が残る。3は土師器皿。完形である。口径9.9 cm。器高1.1 cm。色調は灰茶色。4は土師器皿。一部を破損する。口径9.4 cm。器高1.3 cm。底部に棒の先で引っかいたような細い線が3本残る。使用に伴う痕跡であろう。また口縁の一部にススが付着している。5は瓦の瓦当部分。径は14.0 cm。巴文の周間に連珠を施す。6は埠産の土師質かめ。口径24.6 cm。残存高12.0 cm。7も埠産のかめ。上部が破損し口径不明。残存高19.7 cm。

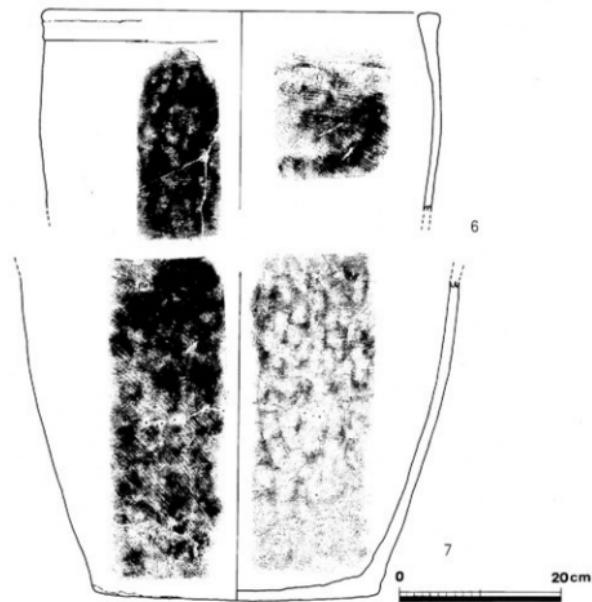
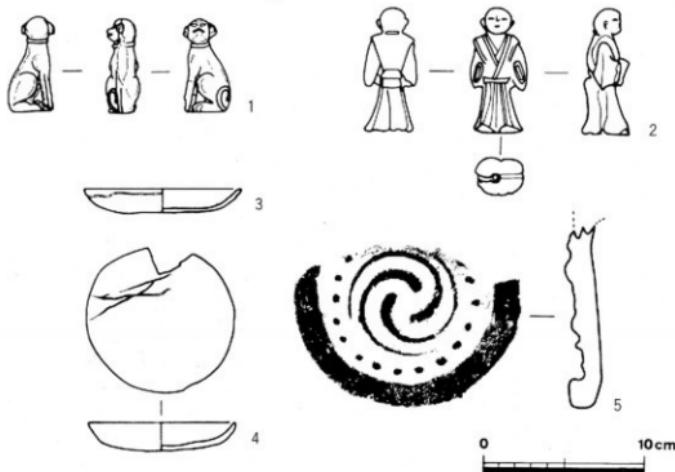


図4 狹山藩陣屋跡01-2区出土遺物



1. 調査前



2. I区全景



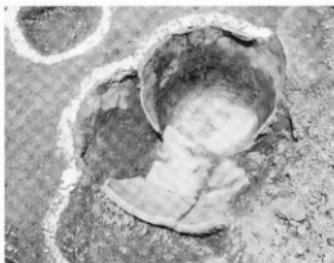
3. I区溝2



4. I区溝1



5. J区全景



6. J区埋蔵構造



7. K区全景



8. L区全景

図4 狹山藩陣屋跡01-2区出土遺物

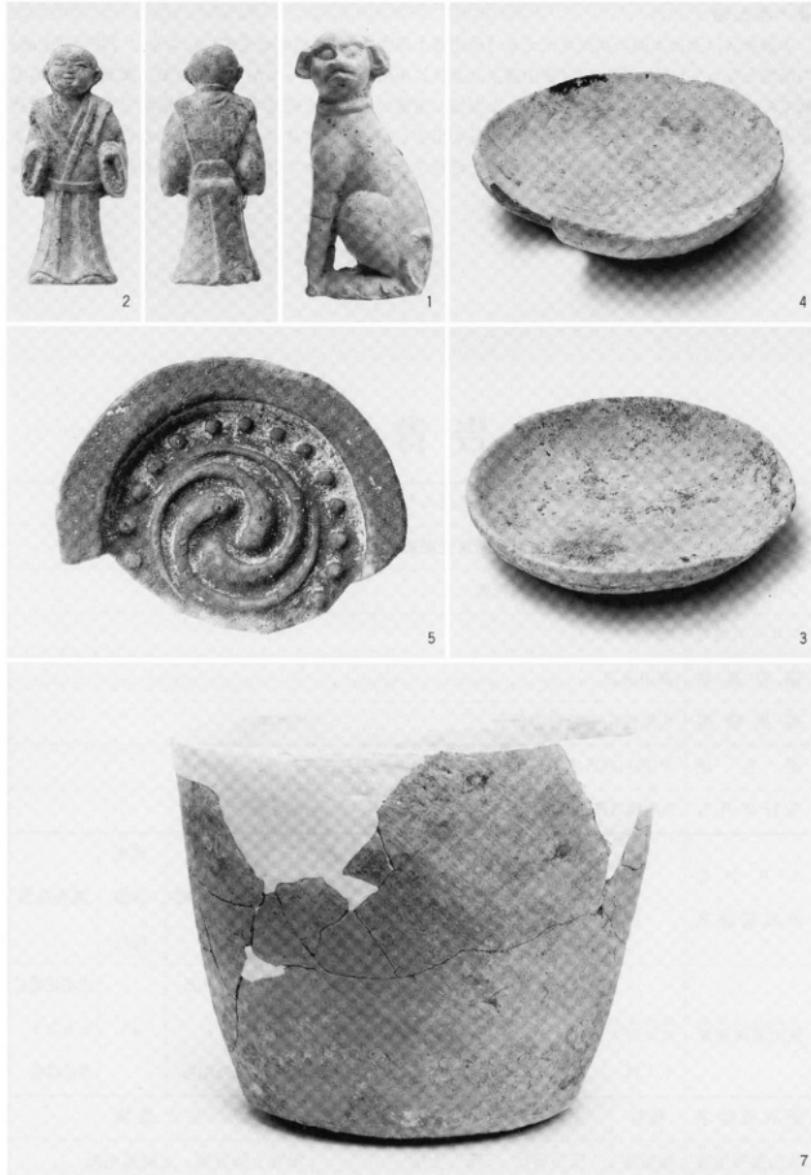


図4 狹山藩陣屋跡01-2区出土遺物

4・まとめ

本調査区は近世末期の状況を伝える『狭山藩上屋敷絵図』(都築家文書)によると『井出甚七郎』の居宅となっている。井出家は狭山藩主北条氏に小田原時代からつかえた家臣で、家老を勤める家柄であった。今回の調査区はいずれも小面積で遺構の広がりを確認することは困難であるが、遺物をみる限り近世の一般的な生活道具や遊具が出土しており、大身の武士としての独自性を特にみることはできない。今後もこのような調査を継続することによって近世の陣屋の姿が徐々にではあるが明確になることと思われる。

報告書抄録

ふりがな	へいせい13ねんど さやまはんじんやあとはくつちょうさほうこくしょ							
しょめい	平成13年度 狹山藩陣屋跡発掘調査報告書							
シリーズ名	大阪狭山市文化財報告書							
シリーズ番号	23							
編著書名	市川秀之							
編集機関	大阪狭山市教育委員会							
所在地	〒589-0005 大阪府大阪狭山市狭山一丁目2384-1							
発行年月日	2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡 番号	北緯	東経	調査期間	面積 (m ²)	調査原因
狭山藩陣屋跡	大阪府大阪狭山市狭山 4丁目	27231		34° 30' 15"	135° 33' 30"	200105 ↓ 200106	45	住宅建築に ともなう 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
狭山藩陣屋跡	城館跡	江戸時代	溝、土坑	漆焼土師質壺、土師器小皿				